唱導の範囲

―その理解の多様性をめぐって―

安東大隆

はじめに

唱導という場合、普通よく、梁の慧皎の撰になる『高僧伝』の、

唱導者。蓋以宣唱法理。開導衆心也。

という記載から、「人々に対して仏教の内容を、説き聞かせるもの」という認識で、理解されていると思う。しかし、唱導の内容が、それのみで理解出来ないこともまた、よく知られているところである。

周知されている、ところではあるが、筑土鈴寛氏は「唱導と本地文学と」(『中世芸文の研究』所収)で、

唱導は説経、談義と同じだ。表白もその中に含まれる。この唱導には二様の方法があったと思う。自分一個では、仮りに表白体の唱導、口頭の唱導とに区別している。

と、述べて、唱導の二種の区別を、提示している。これは、願文・表白等の成文化したもとの、一回性の比喩・因縁等に富むものとを、区別したものであろう。

以前、拙稿(「中古日記にみえる、唱導儀式と、そのうけとり方其一――『中右記』にみえる、中陰の形――」別府大学紀要第二六号)で、少しく言及したところであるが、(『説法明眼論』には)高座にのぼってからの儀式に、ついて、その進行順序と、各〻の儀式の内容が、説明されている。所謂、表白体、および、口頭体の唱導は、その一部分として、存在しているのであり、それが、唱導ということの、全てではない。そういう意味で、いうならば、儀式全体について、言及した、広義の唱導と、従来から言われている、唱導を、とりあつかった、狭義の唱導とに、区別した方が、むしろより適切では、ないかと思う。

ここでは、広義の唱導・狭義の唱導という事について、「唱導の範囲」として、もう少し具体的に、考察してみようと思う。

（一）

唱導が、先に定義したように、「人々に対して仏教の内容を、説き聞かせるもの」とすると、仏教の歴史は、初転法輪の昔から、唱導の歴史・教化の歴史という事になろう。

（勿論、それは、ひとり仏教のみに、限ったことでは、ないであろう。）唱導の歴史・教化の歴史を、時代を経ながら、積み重ねる事によって、仏教の歴史があり、又今日の仏教があるとも言えよう。

唱導というものを、そのように考えていくと、当然、「誰が、何を、何処で、誰に対して、どのようにして、」という疑問に、到着する。「唱導の範囲」という問題は、これらの事とも、関わってこよう。

普通、唱導というと、法要をしてなされるもの、説教をしてなされるものという認識が、先にたつが、唱導が、最終的に目指しているものは、何であろうか。いうまでもなく、仏教の内容を、説き聞かせる事により、仏教に結縁させ、帰依させる事であろう。

では、人々に対して、どのような働きかけを、することにより、仏教に興味を、持たせていったのであろうか。唱導はまた、人々の興味の内容と、深く関わっている。人々の関心の無い方法で、いくら説き聞かせようとしても、所詮効果が薄く、無理な事では、ないだろうか。それらの事を、念頭に置きながら、考察を進めてみよう。

唱導者に関わるものとして、

1、話し方（語り方）の問題

2、話の内容

の二つに分けて、論じてみよう。

1、話し方（語り方）の問題

相手に対して、何かを語りかけ、何かを理解させ、又、共鳴させようとする場合、只単に話しただけでは、なかなか良い結果が、得られるものではない。そこには自ら、その為の方法なり、技術なりが、成長してくるものであろう。

古くは、前述した『高僧伝』の「或雑序因縁。或傍引譬喩。」「夫唱導所貴其事四焉。謂声弁才博。」などが、話し方の技巧について、言及したものである。猶、中国の唱導文学については、澤田瑞穂氏の「唱導文学の生成」（『仏教と中国文学』所収）に、詳述されている。日本のものについて見ると、先ず、石淵八講で知られる勤操が、目に浮かぶ。

（以前、少し述べた事ではあるが）『性霊集』には、

三千の仏名を礼すること廿一年、八座の法花を講ずること三百余会。師吼の雅音聴覚く者腸を断つ、迦陵の哀響見る者愛死す。男女角ひ奔せて心を発し、華野に産を忘れて会を設く。職として悲調の感なり。（引用は、古典文学大系「岩波書店」四三〇頁）

とある。「師吼の雅音・迦陵の哀響」と言っているところから見ると、抑揚を持った、節のある語り口を、連想させる。又、普門院に蔵している、絹本着色の、勤操僧正の絵像を見ると、

像は牀座上斜の右向きに坐し、左膝を乗り出した姿勢で、右手を前に出し、掌を上にむけ数珠をかけ、左手は胸前に掌を外にむけ、第一、二、五指をのばし、口を開き、弁舌中の姿をあらわしている。（原色版『国宝』3「毎日新聞社」解説一二三頁）

という印象を受ける。静かに経の解説を、しているというより、もっと荒々しく、躍動感がある。これは多分、唱導している図であろう。その勤操が示寂したのが、天長四年（八二七）であった。つまり、平安時代の極く初期から、唱導は身振りを含んで、躍動的に実施されていた模様である。

さて、その躍動感の溢れる姿で、唱導している勤操が、いったい誰を相手にして、唱導しているのであろうかという事は、その姿だけでは、想像するしかあるまい。

しかし、その唱導に関する極めて基本的な姿勢―相手が興味を持ち、しかもより理解しやすいように説き聞かせる―は、顕著に示されている。

この唱導に関しての基本的な姿勢は、変化なく維持され、更に発展し、詳細になっていくのである。ずっと後世のことであるが、例えば、江戸時代の唱導論書である『説法式要』―この書は江戸時代の唱導論書の嚆矢に位置するもので、広く流布し評価されていた。―（近世の唱導論書―『説法式要』巻一―後小路薫氏『文藝論叢』第24号参照）を見ると、一から廿六までの細項を、設けて詳細に実践的な心構えや方法について、説明している。如何に詳細であるかは、

次ニ扇ヲ取ル、古ヘハ両手ヲ以テ堅起スル事ト、笏ヲ持カ如ク、少シ右ノ方ニ傾フクニ似テ、声ヲ発コト宮ノ調子ヲ取ル、是レ諸調音声ノ本ト也、発端ノ詞ハ時宜ニ依ヘシ、今日ノ説法ハ、奉開御経ハ、奉訓読御疏ハ、如此言緒多端也、復宜説ノ言便ハ連続シテ爽ナルコト、喩ヘハ五尺ノ菖蒲ニ水ヲ洒カ如ク、小良小良トシテ渋滞無キヲ以テ善トス、其ノ責ニ成テハ懸河ノ弁ヲ施コス、是喩ヘハ瀧水ノ落チ泉源ノ流ルガ如シ、序破急ノ詞弁能ク分別スベシ、頭ヲ振扇ヲ扣キ手ヲ揚テ真似スル等ハ、一向其ノ式ニ非ス、如来ハ手ニ定印ヲ結ビロニ説法シ玉ヘリ、若シ夫レ扇ヲ以テ拍子ヲ取ルハ自然ノ事也ト可知、

これは、「説法序詞」（前掲論文より引用）の一部分であるが、これを一読しただけでも、明らかである。

これらは、総て唱導の実を、あげようという目的によって、案出されたものである。

又、『沙石集』にある「説経師下風讃タル事」にも、聴聞の若い女房が、下風をしたのを、澄憲が、讃めた話が出でくる。作者無住は、「讃悪キ事ヲモ被讃ケルニヤ。實ノ辨説ニコソ。」と称讃している。臨機応変に唱導していた、説経師の姿が、浮かんでくる。

このような例でも、知られるように唱導は、常に説経者と聴聞者との関わりによって、成立したものである。それらの事は又、唱導という事の無限の広がりを、示唆している事にもなるであろう。

『法則集』(信承法師撰・天台宗全書所収)を見ても、語り方や述べ方について、子細な工夫が凝らされている。

一。説法一座姿ハ初シミ。中タトク。終哀ナル是其體トス。

これは、説法の全体の流れと、起伏についての注意である。つまり、唱導する場合に、一本調子でするのでは、なくして全体も把握しながら、起伏を作り、抑揚を持たせて、説き聞かせようと、したものである。

又、表白願文等の文章についても、

一。口傳　説經師能可存知事。文章姿也。隔句必二句上下各切目可令聞分也。隔句如長句讀亂長句様混同。二句不澄感不動説經反倒。只此等所存知分所致也

とある。文章を作成する場合でも、充分に吟味して、四六文等の技巧を凝らした、装飾性豊かな文章を、作成したのである。

一。口傳云。調子アシク不自在時高不可擧音。可最略不足被云無難也。聞アカレタルバカリノ説經ナラバ可略也云々

調子の悪い時には、どのようにして、その場を取繕っていくかという、注意である。微に入り細に亙って、色々な場合を想定して、準備されているのである。それだけに又、唱導が、盛んで多くの場面に、出会う事が、あったのであろう。

話し方(語り方)の問題は、以上の事から、多くの場合があり、周到に容易されていた事がわかる。

2、話の内容について

話し方同様に、話の内容も又、重要な問題である。これは、何を聴聞者に対して、説き聞かしめるかという問題である。勿論、その目的とするところは、前述した造り、「人々に対して仏教の内容を、説き聞かせる事により、仏教に結縁させ、帰依させる事」を、目指したものである。従って、その目的に添う、色々な話という事になろう。そして又それは、聴聞者の要求にも、応えるものでなくては、なるまい。もう少し具体的に、考察してみたい。

法華八講の濫觴といわれる周知の、石淵八講(『三宝絵詞』)は、栄好の先妣の為に勤操が、実施したものである。(七々日の忌の間は此寺に来て一日に一鉢をまうけて、一人に一巻を講ぜしむ)勤操は、自分の手落ち(酒を飲み過ぎて、栄好の母に、食事を送るのを、失念してしまい、それが原因で、栄好の母を死亡せしめた事)もあり、「その命已にたえにたり。なげきてもかひなし。今は後世をみちびかむと思」って、八講を始める。これは、亡き人の追善の為のものである。法華八講は、追善供養という事を、目的として、実施されたのである。この事は、その後の仏教と、人々の関わりを、暗示するものであった。またこれは、仏教が、いかに受容されてきたかという事と、関連がある。仏教の、日本に於ける受容は、個人の悟りを、目的としたものとばかりとは、言い難い。それは、奈良時代の仏教の在り方を見れば、よく納得できる。つまり、国家を鎮護するものであったり、現世における利益を、求めるものであったりした。又、今述べた、追善供養も、重要な受容の一つであった。このような事を、念頭におきながら、

人々は仏教に、結縁しようとしたのである。『枕草子』の小白河の八講の段にも、「そこにて上達部、結縁の八縁の八講し給ふ」とある。

更に、詳細な例を『澄憲作文集』に見ると、

一、国王　二、院徳　三、関白　四、大臣　五、納言　六、宰相　七、国司　八、前司　九、文者　十、武者

等の、身分に関するもの

卅三、父母　卅四、養父母等の、肉親に関するもの

卅七、生苦　卅八、病苦等の、現実の状態に関するもの

を中心としながら、七十三の細目を列挙して、それぞれに即応した、願文や表白が、製作出来るように、準備されている。

これらの例は、供養会等の状況が、いかに、多岐に亙っていたかを、示しているものである。即ち、それだけ多くの、内容の異なる受容が、存在したということであろう。

扨て、そこで、話される話の内容は、以上述べたような目的に、合った内容の話、もしくは、その目的に、誘導しうる話、と言うことになろう。このように、規定することは、出来るものの、しかし、甚だ漠然としていて、どの話も、そうなる可能性を、内含している事も又、事実である。時には、その可能性の幅を逸脱して、施主に何る結果を、将来した場合もあった。『沙石集』(巻六―六「随機施主分ノ事」)にあるような例である。大津の漁師達が、説経師を何回も請じたが、なかなか思うような説教を、聞けなかった。ある説経師が心得て、

各ノ近江湖ノ鱗トリ給フ事ハ、目出度キ功徳也。其故ハ、此湖ハ天台大師ノ御眼ナリ。佛ノ御眼ノチリヲトルハ、ユユシキ功徳トナルベシ(引用は、古典文学大系「岩波書店」による。)

文字通り随機の施主分を、展開する。その結果、布施物が多かったことは、勿論である。これは、相手に迎合し過ぎたものである。この説話は、『百座法談』等に、引用されている、非濁の『三宝感応要略録』を出典とする、阿弥陀魚の譚を、基礎においているものと、思われる。『法則集』の

一、因縁法門等ヲバスル時。大筋ダニタガハザレバ語何替不苦。

とあるのは、このような場合の、柔軟性についての、指示であろう。

以上、唱導者に関するものとして、二点を取り上げて、考察してきたのであるが、それから受ける印象は、次のようである。

1、仏道修業に付随して、唱導があるというのではなくて独立した大系を持っていた。

2、話し方・話の内容の両者共に、詳細に且つ具体的に、準備されている。

3、話し方・話の内容の両者共に、広い許容範囲を持ち、柔軟に対処されていた。

以上、唱導の柔軟性というような事について、言及してき

た。その柔軟性の故に、従来、言われている、口頭体の唱導に、ついての論のような、印象を、受けるやも知れないので、ここで、改めて、願文・表白等について、述べておこう。

願文・表白は、人々に対して、仏教の内容を、説き開かせて、それによって、聴衆をして、仏教に、帰依せしめるというような働きとは、若干、性質を異にしている。この二つは、いずれも、仏前において、その法会や修法の、目的や趣旨を、奏上するものである。既に唱導され、仏教に帰依している人々がいて、その人々が、ある目的のもとに、法会等を開き、その趣旨を、願文・表白に書いて、仏前に奏上する。というような、大まかな図式が、成立しよう。ところが、『釈氏要覧』には、「表白　僧史略云。亦日唱導也」とあり、表白と唱導とを、同じ意味に理解している。この理解は、今述べた定義とは、いささか、異なるものである。仏教に関わらせるもの、としてみると、その範疇に、はいるであろう。

扨て、願文・表白は、臨機応変に、聴聞者に対して、法を説き聞かせるという、自由さは、少ない。これは、書いたものを、仏前で、拝読するという性質上、どうしても、そうならざるをえない。では、どのようにして、多岐に亘る受容に、応じたのであろうか。その場で、聴聞者の様子や反応に、応じる事の出来ないだけに、その法会や修法に、適合した願文や表白を、作成することから、その受容に応える用意が、始まっている。前もって、想を練り、吟味して文章を、作成する。今日残っている、所謂唱導書の類は、願文や表白を、作成する為の、参考書であったり、既に作成されている、模範文であったりする。

『唱導鈔』には、

大歳名　十二月付四季名　五幾内国名　左右坊門名
帝王名付君所号
　　賛　崩
院付名法皇名　居所　東宮名付居所
　　賛　御悩　崩　賛

の、人物に関するものを、はじめとして、言葉の使い方の例が、示されている。

『類句抄』には、「仏法」「無常」「孝養」等の項目を設けて、実際の願文等の中から、要句を、抜出して書きとどめている。『作文言詞集』も又『類句抄』と、同様な性質を、持つものである。『諷誦指南集』も、同種である。それらのものを、参照しながら、作成され、実際に使用された例文は、『本朝文粋』等の中にも、集録されているくらいである。

このように、何段階にも、分けるようにして、願文・表白等の製作の作業は、実施されたのである。

それらの、一連の姿は、専門的であり、大系化されているものであると、いわねばなるまい。従って又、その事を、家業とするような家が、出現してくるのも、ある意味では、必然的な事であろう。安居院流は、その最たるものである。

（二）

（一）に於て、「唱導者に関わるもの」として、二点に分けて、言及してきたが、ここでは、視点を変えて、「聴聞者に関わるもの」について、考えてみたい。

聴聞者に関わるものとして、考えられるのは、どのような動機（目的）で、聴聞するか。又、その聴聞の仕方は、どのようなものか。この二点が、その主たるものであろう。

1、どのような動機（目的）で、聴聞するか。

聴聞するという行為は、言うまでもなく、その場を作って聴く、もしくは、その場に出かけて行って聴く、ということである。従って、その場は、どのような目的で、設定されているかという事と、深く関わってくる。

『大鏡』は、周知のように、雲林院の菩提講に詣でた話から、始まる。菩提講は、後世の菩提を得る（往生極楽）為に、『法花経』を、講ずる法会である。この講会には、多くの人が、参詣している。老若男女を取混ぜての、多くの人々である、人々は、その講会に「いきあひて」聴聞する。あちこちで、同じような講会が、催されているのである。

としごろ、こゝかしこの説経とのゝしれど、なにかはとてまいらず侍。さしこくおもひたちてまいり侍にけるがうれしき事（古典文学大系　岩波書店『大鏡』より引用、傍線は、私に付したものである。以下も同じ）

菩提講が、雲林院で行われる由を、聞及んで、多くの人が、聴聞に来るのである。

菩提講に出掛けて、説経を聴聞し、仏教に結縁した人々は、そこに何を求めたのかは、明らかである。

『中右記』（承徳二年五月一日―増補史料大成「臨川書店」）には、雲林院の菩提講の様を、次のように記している。

一條尼上并寝殿御方令参雲林院菩提講給、予為御共参入――講師登高座間、於堂北庇聴聞、講師院範先授三帰十戒、次説經、人々所供養經巳及數十部、寝殿御方令供養名字功徳品、始説法之間誠以随喜、巳時許事了、堂中並座老少男女稱南無聲遍満如雷、――

院範講師の説経を、聴聞した人々（堂中並座老少男女）は、「説法之間誠以随喜」し、終了すると、「稱南無聲遍満如雷」の様相を呈する。念仏を口称することによって、後世に菩提を、得ようとしたのであろう。生前に善根を修して、それを廻向し、死後、極楽に、往生しようという願望のもとに、菩提講に行き、結縁し、念仏しているのである。

後世の菩提を求めて、講会に結縁するというのは、よくおこなわれている。誰の為の後世の菩提かというと、その講会を実施したり、参加したりする、その人の場合もあるし、又その人の父母等、その人にゆかりのある人々の、場合もある。

そのように、後世に菩提を求めるというのは、大変大きな理由である。その他、どのような理由が、考えられるのであろうか。『本朝文粋』の巻の十三・十四の「願文上・願文下」を見ると、二十八の願文を、収録しているが、その内の十六が、

四十九日等の追善に、関するものである。これも又、亡き人の菩提を、念じてのものである。『本朝続文粋』の場合を見ても、同様の事がいえる。これらの事が、聴聞の大きな動機になっている。更に『百座放談』においても、そうである。

さる内親王が、百座の法華の講を行って、(実際には三百座、残っているものは二十日間のものである)亡き両親の追善をする。

此経を先考聖朝、先妣贈后の御ために廻向し〔ママ〕させ給こそ、尤も可然事とおぼへ候へ。孝養報恩をもて、仏も旨とほめ悦び給ふ事なり。(桜楓社　佐藤亮雄氏校註)

亡き両親を、追善する為の開講が、同時に、内親王御自身の為の、功徳にもなっている。

○此経を一偈一句にても、かき、よみたてまつらむ人は、たゞちに釈迦牟尼仏のとかせたまうをきゝ、釈迦牟尼如来の霊山にまし〳〵しを供養したてまつられたまうにこそさぶらひければ、内親王殿下の御功徳、まうすかぎりなき事也。　(三月廿六日)

○何況や、内親王殿下の名聞のためにもあらず、利益のためにもあらず、心をいたして、一部八巻廿八品をしかしながら受持・読誦し、日々に開講、演説せしめ給ふ。心しても思ひ、ことばしても申つくすべからぬ御功徳とこそ思え候へ。(六月廿六日)

又、先考、先妣の為の追善という事には、触れずに、専らに内親王の功徳について、言及している施主分もある。

○内親王殿下ふかくこの由をしろしめして、人界の栄華栄耀なにゝかはせむ、万事みな夢のごときにこそはあれ、とおぼしめして、刹利の家にむまれおはしまして、この生のたのしみをのみこそ、おぼしめすべけれど、偏に後世菩提を御心にかけおはしまして、日々に講経を開きおはしませる、いさぎよき御功徳は、三宝の境界をのづから知見し給らむ。(閏七月八日)

「偏に後世菩提を御心にかけおはしまして」とあるのは、勿論内親王自身の、後世の菩提についての事である。

前述したように此等は、後世の事を心に懸けて、その為に講を開いているのである。後世に菩提を、得ようという考えと、今は亡き縁者の、追善供養とは、一見すると、相反しているかのように、思われるのであるが、あながちそうとも、言えない一面を、持っている。というのは、両者とも菩提というところで、関連しているのである。生者が、後世に菩提を得るということと、既にこの世に亡い人が、菩提を追善供養に依って、あの世(後世)で得ようということである。生者と死者の区別はあるものの、ともに菩提を、次の世で、得ようというのである。(当時、完全な悟りを求めれば、求める程、この現在の世に於て、それを完成する事の困難さが、わかり、自然と、完全な悟りを、肉体的な制約を、離れた死後の世界に、求めるように、なっていったのである。)

このような理解によってみると、大江匡衡作の「為左大臣供養浄妙寺願文」(『本朝文粋』)の末尾にも、

願共諸衆生。上征兜率。西遇彌陀

とある。又、三善道統の作の「為空也上人。供養金字大般若経願文」にも、

緇素尊卑。同浴佛海之無邊。須保壽木之不老。乃至有縁無縁。現界他界。無始以来。所有群類。動五逆四重之辜。免三悪八難之苦。荒原古今之骨。東岱先後之魂。併關薫修。咸證妙覚。

とある。更に又、大江匡衡作の「為仁康上人。修五時講願文」にも、

佛子今願亦復如是。凡厥發因起縁。或順或逆。皆以今日之善根。將為来世之張本。願共諸衆生。往生安楽國。南無釈迦牟尼佛。

とある。此れ等はそれぞれ、願文の目的は、異なるものの、その結びの文章は、類似している。具体的に何を対象として、その法会が、開講されようとも、その功徳によって、人々の願うところは、後世の菩提である場合が、多い。

2、聴聞の仕方は、どのようなものか。

聴聞の仕方（聴聞の態度）は、前述の動機にも、大いに、関連してくるものである。動機が、確かで、真摯なものであれば、自然とその聴聞の仕方もまた、真面目で、真剣なものになるであろう。

説法を聴聞し、感動した人々の様子は、公家の日記等に、散見されるところである。

説法之間落涙難抑者也（『中右記』）

というような賛辞で、結ばれている。

『雑談集』（三弥井書店刊より引用）には、「知恵才覚無テ、然モ又音声ワルク、口モキカズシテアル説法者」が、六人の尼に依頼して、「我ガ説法ノ時、必ズ聴聞ニツラナツテ、ナキテタベ」と、感涙する役目を頼む。説法に感動した者は、感涙するという事であり、即ち、そのような結果が現れる事が、すばらしい説教の証である、と同時に、聴衆が、いかに熱心に、且つ真面目に、聴聞したかの証拠でも、あった。

唱導者の中には、又、時処諸縁を嫌わずに、でかけて行ったものも、あった。

大和國ニ説經師アリケリ。何ナル賤家ニモ行テ、唱導シケレバ、請ジ安キマヽニ、ヨロズノ所ニテセサセケル。

『沙石集』六―四　岩波古典文学大系より引用）、

又、源大夫の説話（『今昔物語集』巻19・14）の様に、遇然に唱導の場に、行き合わせて、聴聞する場合もあった。この場合は、「『何ナル事ヲ云フゾ』去来行テ聞カム。」と、思って聞くのであるが、やがて、講師の話の内容に、同感して出家してしまう。説教の内容を、疑い無く、真面目に受け取ったのである。今迄、無知であっただけに、一度の結縁が、決定的な転機を、齎したものであろう。

このようにして、当時の多くの人々は、仏教に縁を、結んでいったものであろう。

おわりに

さて、唱導というものを、「唱導者に関わるもの」、「聴聞者

に関わるもの」の二点から、見てきたのであるが、それらの考察の中で、唱導というもののもっている、広がりと大きさを、指摘できたと思う。「説法義」ということも、充分頷ける、規模の大きさである。そして、それらの基礎には、当時の仏教的土壌ともいうべき、仏教に対する共通の理解がある。その土壌ともいうべき、仏教に対しての共通の理解は、勿論、唱導者と聴聞者に、共通のものである事は、論を俟たない。その共通の仏教的土壌の上に立って、唱導活動は、為されたのである。いわば、唱導は、仏教の総合的な作用のようなものでは、ないかと思う。甚だ抽象的な述べ方をすると、唱導というものは、仏教の拡大と発展の基礎であると、言えよう。

そして、唱導は、多くの人々をして、仏教に結縁させていく、具体的な作業の縁を、作った仏教的儀式を含めて、理解さるべきものであろう。その儀式全体をさして、広義の唱導といい、更にその中で、為される願文・表白などの諷誦を、含んだ教化活動をさす、狭義の唱導とに、区別するのが、適当であろうと、思うのである。